

ゲーテ大学留学体験記

経済学部経済経営学科 3年 金谷竜太郎

ドイツ・フランクフルトの **Johann Wolfgang Goethe Universität Frankfurt am Main** という大学での 2012 年 3~7 月の一学期間をここで振り返っていきたいと思います。

学部間の交換留学なので、大学では経済経営学部に配属されることになりました。大学では英語による経済の授業が受講可能でしたが、英語で行われるものは院生向けに行われるものがほとんどだったので必然的に内容も高度なものが多かった。また、ドイツの大学では日本と異なり、週に 4~5 コマが標準だそうです。日本では新入生の時には大体 20 コマぐらいは入れるということドイツ人の友人に話したらとても驚いていました。経済の授業だけに縛られたくないという思いと、内容の難易度と負担を考慮して授業は 3 つしかとりませんでした。とはいっても、日本のように各授業の時間が一定なわけではなく、それぞれ週当たり 2,3,4 時間の合計 9 時間だったので、京大だと週 6 コマの計算です。受講していた授業を日本語で言うならば、「ブランドマネジメント」「国際貿易と発展」「証券市場のしくみ」といったものになるのですが、院生向けの授業ということもあってか、マーケティングのような内容でも数学的手法を多用していた点が印象的であったとともに、苦戦した点でもありました。また、二番目の国際貿易の授業は、マクロ経済が世界経済をリードしていこうとした過程で何をどのように誤ったのかという命題を、歴史を振り返りながら実証的に考察していました。教授が東京大学でかつて研究をしていたということもあるのか、日本を一つの大きな考察対象、参照として分析をするシーンが多々あったこともあってこの授業は非常に有意義だったと思います。

経済の授業はこのように英語ができれば十分でしたが、やはり生活にはドイツ語が必要でした。ちなみに、京大での第二外国語はドイツ語ではなく、渡航前にもそこまで勉強したわけではありませんでした。実は、正式な学期が始まるのは 4 月であるのにも関わらず 3 月に渡航した理由は、大学で留学生向けに開講されていたドイツ語インテンシブコースを受講するためだったのですが、受講には少なくとも中級周辺の能力が求められていたため、勉強不足であった僕は受講を認められませんでした。学校も始まっておらず、やることもなかったので、3 月中は市内の語学学校に通うことにしました。脱線しますが、この語学学校に行かなければならなくなってしまったことはかえって良かったと思いました。なぜなら、実際に教室に行ってみると 25,30,35 歳といった自分より年上の人ばかりでした。彼らは、自国よりも経済的に豊かなドイツで生計を立て、そのためにドイツ語はどうしても必要だということでした。若い僕の方が飲み込みは早かったですが、彼らのドイツ語へのモチベーションには脱帽でしたし、同時に近年グローバル化の中で海外に対する意識が未だなお低いと騒がれる日本でも、ここまでする必要はないと思うとやはり幸せな環境で育てられたことをここで改めて実感できたからです。さて、学期が始まると初心者のためのコースが大学でも開講され、10 人ほどの他の留学生に交じり僕も参加しました。発言する

ことにとても重きを置いた授業で、他の学生がためらうことなく発言、質問していたので負けじと授業に参加する意識が高まり、それが効率的な学習につながったと思います。授業で習うものはそこまで難しい内容ではなかったですが、授業外の日常のシーンで実際にあるフレーズを使用、応用した結果コミュニケーションが取れたことで喜びが生まれ、もっと難しい内容でもしゃべれるようになりたいというモチベーションにつながったことがとても良かったと思いますし、これが現地で語学を学ぶ醍醐味だとも思います。また、それでもドイツ語のモチベーションが落ちることがありましたが、その時は英語を勉強するようにし、飽きたらまたドイツ語、というサイクルが自分の中で生まれていたため語学に対するモチベーションは強弱の程度はあれ留学期間中、一時たりとも切れることがなかったと思います。

プライベートでも非常に充実した時間を過ごすことができました。仲の良い友達とは一定の周期で一緒にランチやディナーを取ったり、毎週末にはパーティに参加したりして、常に交流を意識していました。その結果、知り合いはどんどん増えていき、他のイベントに誘われるといったこともありました。楽しもうと思って参加していたのはもちろんですが、様々なバックグラウンドを持った人に会うこと、英語を使う機会を得るということもパーティの目的でした。酒があれば普段話せないような人でも互いの緊張が切れ、会話が弾むことが多々ありました。他には、休日は留学生の仲間とサッカーをしたり、旅行もしました。こうしたプライベートの面で一番誇らしいことは、日本人がほとんどいなかった異文化の中でも内向きにならずに常に前に出て行ったことです。英語圏外から来た留学生ばかりでしたが、ヨーロッパの学生は特に、僕からしてみれば英語がうまかった。確かに自分の拙い英語が相手にどう思われているか気になったり、相手の言ってることが理解できないということはしばしばでしたが、周りも英語は第一言語ではないし、英語が下手なら堂々と下手と思われれば良いと開きなおっていました。それでも自分のことを慕ってくれた友人が少なからずいたことは自分に大きな自信をもたらし、語学はコミュニケーションのツールのほんの一つでしかないということを実感させてくれました。

この留学ではスキルや学術的な点というよりもむしろ精神的に成長できたところが一番の収穫になったと思います。帰国後、外国人に全く臆さずに話しかけるようになったこと。異文化の中で自身、自国というものを意識するようになったことで自分の将来設計にはっきりした道ができたこと。常に良いか分かりませんが、自分の意見を言わないと理解してもらえない中で自分の意見を年齢や立場に関係なく堂々と言えるようになったこと。老人や子供など弱い人を特に配慮し、支えるドイツの文化に学び日本でも以前よりためらうことなくそのような人々に手を差し伸べられるようになったこと。語学や学業での成績向上もちろん大切かもしれませんが、このように人間として必要なことの大切さを教えてくれたのが今回の留学だと思っています。このような機会を与えてくださった両親、大学、黒澤教授には本当に感謝しています。本当にありがとうございました。